

性行為と 心血管事故の 発生の関連

元東京都観察医務院院長 **上野正彦**
Masahiko Ueno



性交死の概念

性行為は生きるものにとって不可欠のものであり、種の保存であるから本能としてはじめから、からだの中に組み込まれている。しかし事柄の性質上、行為は秘めごととして隠されてきた。それだけではなく、これには快感、快楽が伴い、愛という異性間特有の感情も加わり、複雑に深く人間の生活の中にくい込んでいる。

性行為をするような元気な人が突然死する場合は、医師法第21条によって変死届をすることになっている。理由は死者が病死なのか、自殺あるいは他殺ではないのかなどを明白にし、死者の人権を擁護すると同時に社会秩序を維持するために警察官立会のもと、医師の検死が行われるのである。東京都23区内は監察医制度が施行されているから、このような突然死はすべて変死扱いになり、監察医が検死・解剖しているのである。この制度によって私は東京都監察医在職30年間に500例を超える性交

死（腹上死）の実態¹⁾を観察することができた。

腹上死というとその文字を見て行為中の死亡と思いついでいる人が多いが、実はそうではない。概念をはっきりさせておく必要がある。

腹上死の語源は1247年中国の世界最古の法医学書といわれる「洗冤録^{せんえんろく}」の中に見られる。作過死^{ツオグオス}という項目があり「凡男子作過太多精気耗尽脱死於婦人身上者。真偽不可不察真則陽不衰偽者則痿」読めなくても意味はわかる。「およそ男子の性行為が過度になると、精気をことごとく使いはたし、婦人の身の上で死亡することがある。真か偽りかを見分けられないことはない。真の場合はペニスは衰えず勃起しているが、偽りの場合は萎縮している」というのである。しかし若い男は誰でも過淫の傾向があるが死ぬ者はいない。また作過死の場合は勃起しているが、偽りの場合は萎縮しているから区別がつくといっているが、死ねば神経はマヒするからペニスは萎縮してしまう。それはともかく、その文章の中に語源を見出すことができる。

作過死^{トシヤンス}、脱腸死^{トシヤンス}がそれである。朝鮮半島では「死於婦人身上者」を腹上死としたのであろう。それが日本に伝わったと推測される。なお台湾では性交中の急死を上馬風^{サンマフウ}その後の急死を下馬風^{シマフウ}といい、両者を色風^{スエフウ}と総称している。それが適切な表現であるが、わが国では残念ながら腹上死が定着したから、女性の腹の上で行為中に死ぬのが腹上死だと勝手に解釈しているのだろう。正しくは行為後の死亡も含めて、腹上死すなわち色風と考えなければならない。横文字の国では直訳すれば性交死ということになる。



調査成績

(1) 死因別：心血管系は56%をしめ、脳血管系は43%、その他1%であった。

心血管系では冠状動脈硬化や心筋梗塞（虚血性心不全）が80%をしめ、心肥大15%、その他5%であった。脳血管系ではクモ膜下出血60%、脳出血

35%、その他5%であった。

- (2) 年齢別、年齢差：30代、40代の中年層に多い。男女の年齢差は大なる傾向があった。
- (3) 季節別、場所別：春に多く、場所は自宅、ホテル、愛人宅の順であった。
- (4) 男女の間柄：夫婦間と愛人関係が全体の70%をしめる。夫婦間の場合は長い出張から帰った晩とか過労気味の場合が多かった。なおオナニー中の急死も8%みられた。
- (5) 行為から死亡までの時間：心臓死例は行為中の急死は意外に少なく、行為後数時間を経た就寝中に突然発症急死する。脳血管系は行為中に発症し、死亡までに数時間かかっている。総合すると行為後の死亡の方がはるかに多いことになる。
- (6) 解剖所見：冠状動脈硬化、脳動脈瘤、心肥大など死因のベースがあり、さらに体質的に副腎皮質菲薄、胸腺残存などがみられた。なお行為に先立ち30%は飲酒していた。



考 察

性交死の成因について内田²⁾は動脈瘤、脳動脈硬化、心筋変性などを有するものが性交中精神的、肉体的興奮によって急死するもので、行為後死亡する例も同じであると述べている。

Schrader³⁾は性交死の数例を報告しているが、さらに健康な成人男女の脈拍と血圧を記録している。それによると性交中心拍動は不規則となり、性交前より約1.5倍増加し、同時に血圧は上昇し著明に変動する。性交後は

脈拍は頻数となり強く重複して血圧は下降すると述べている。

またMasters⁴⁾らは行為前、中、後の血圧の変動や心臓の負担を心電図にとらえ記録し、性行為は精神的、肉体的にからだに大きな影響を及ぼしていることを指摘している。



結 論

誰もが性交死するものではない。冠状動脈硬化、脳動脈瘤、心肥大、副腎皮質菲薄、胸腺残存など潜在的疾患のある人が、これに気づかず健康者として日常生活を営んでいるところに最大の原因が潜んでいる。特にこのような人が普段と多少異なる環境の変化（飲酒、ホテル、愛人、年齢差大）などで精神的興奮が高まっているところへ、性交という興奮と消耗が一気に負荷されるから、潜在的疾患が発症し死という結果がもたらされる。

このことはなにも性交死に限ったことではない。あの電車に乗り遅れたら遅刻すると急いで階段をのぼり電車にとび乗ったとたん急死するとか、スポーツ中の急死なども同様である。

これを予防するには、各自が潜在的疾患に早く気づき、治療を含めて生活態度を改めていくことが先決である。

文 献

- 1) 上野正彦：性交死(腹上死)の実態。Sexual Medicine 3(1)：28-33, 1976
- 2) 内田長平：台湾医学雑誌 35：465, 1936
- 3) Schrader G：Deutsche Zeitschrift für die gesamte Geriatrike Medigin 18：223, 1932
- 4) Masters WH：Human Sexual Response, Little Brown and Company, Boston：日本語版「人間の性反応」, 池田書店, 1966